WASON
HQ
1.C4
J74+

May. 1896
no. 380

明治十九年初刊

女學雜誌

每週土曜日發兌

第三百八十號

要目

庭若竹
橋松佳話
曝背居記
戲曲及び演劇の改良
嬰兒の精神
翁丸
名媛百絕

明治二十七年五月十九日發兌

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

第三百八十號目録

附録

庭若竹

社説

戯曲及び演劇の改良

文しらべ

名媛百絶（中）

叩扉

岡山孤兒院を訪ふ（第二）　櫻井生

岡山感化院

孤兒院の起原

人生の半面は奇跡なり

炭谷小梅女史

山陽新報の評言

雜録

翁丸

逸事

竹の操（第三技）　枕居哲七

徒然草

偶録（識不識）

逝懷（無名子）

曝背居記（市谷生）

小説

橋松佳話（第四回）　花圃女史

ゆきあいの橋（中）

論説

嬰兒の精神及び其發達（其三）　竹内楠三

（四）感應の分化

（い）類に基く感應の結合

（ろ）時に基く感應の結合　○同時の結合○繼續に基く結合

（は）感應結合の痕跡

時報

華族女學校行啓○大御心を海軍に寄せ給ふ○武子女王殿下◎福島師範學校女子部の發議○小學校女生徒の發議○富山縣の女教員○群馬縣下の子守學校○盲唖生の現在數○山口縣學齡兒童の統計○嘱托學校醫○奇妙なる教員の資格○學校教育と家庭の教育○小生學徒の親力◎貞婦賞を受く○孝女孝を思ふて婿を迎へず◎女子家政學會○春日局實父の後裔

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

五月七日上野櫻雲臺にて櫻園龍子の發會兼題

庭の若竹

おひいてゝにはのをしへもまたしらぬ
たけのすかたのすなほなるかな　高崎正風

ことしおひのにはのわか竹いとはやも
あふくはかりになりにけるかな　黒川眞頼

にはのおものわかたけを見て學ひなむ
すくなるのみかふしもありけり　鈴木重嶺

おもしろきふしさへみゆるわかたけに
にはのをしへのほとそしらるゝ　三田葆光

わかにはのいさゝむらたけいさゝかの
いはまてこそおひいてにけれ　小出粲

おやもさそうれしかるらんかゝれとて
をしへしにはにしけるわかたけ　佐々木古信

卯のはなのゆきくつれするあさかせに
そよくもすゝしにはのわかたけ　橘道守

にはにおふることしのたけのわかみとり
ちひろのかけもいまに見るらむ　加藤安彦

なつの日のすゝしきかけをたのむまて
にはのわかたけ茂りそめけり　梅村宣雄

ことしおひのにはのわかたけとしをへて
ちひろにしけれにはのわかたけ　佐々木信綱

くらからぬまなひのまとにぬけいてゝ
おひさき見ゆるにはのわかたけ　鶴久子

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

大方のよにぬけいてむわかたけの
ことしは庭に生てけるかな　中島歌子

龍子君のうくひすてふ小説かき給へりしとを
おもひいてゝ

うくひすのはつ音やとせしわかたけの
よたちの末のかけはたのもし　水原未琉子

かせの音も日にけにたかくなりにけり
にはのわかたけ新葉さしつゝ　江刺恒久

にはの面にことしおひたるわかたけは
やかて千ひろのかけとこそなれ　服部磯子

生たゝむふしをかさねしわかたけの
にはもせきまてやかてしけらむ　尾崎静子

おひいつるおなしそのふのわか竹も
ひとふしたかきかけは見えけり　田中みの子

あさな夕なのひゆくさまのみゆるかな
すゝみゆく世のにはのわかたけ　水野忠敬

ことしおひの庭のわかたけかきりなく
うれしきふしのそひしやとかな　鍋島榮子

千代やちよつきぬねさしのみゆるかな
ことしおひたるにはのわかたけ　小笠原都や子

としとしにおひしけるらむふしことに
千代を籠たる庭の若竹　増山三雪子

ことしおひのたけもいつしか葉になりて
みるめすゝしきにはのわかたけ　中牟田今子

たけの子はのきまてたかくなりにけり
いつか千ひろのかけを見るらむ　荒井郁

きのふより今日はみとりのいろそひて
まきはひらけしにはのわかたけ　綾小路八十子

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

すく〳〵といく千ひろまておひたゝむ
こゝろもこもるにはのわかたけ　岡崎撫松

ぬけいてゝひとふしたかくみゆるかな
しけれる中のにはのわかたけ　天野瀧子

しけりゆくにはのわかたけ日にそへて
ひとふしことにみえわたるかな　萩原京子

のどかなる庭におひたるわかたけは
かねて千ひろのかけそこもれる　伊東のふ子

わかやとのにはのわかたけとし〳〵に
かつそふみるそうれしかりける　同　夏子

親はたゝひともとなれとわかたけの
にはくらきまておひいてにけり　中牟田常子

ふりつゝくあめにみどりのいろそひて
しけりさかえむにはのわかたけ　荒井みな子

重けにも葉すえのつゆのみゆるかな
またうらわかきにはのなよたけ　白井鳳子

ことし生のみそゝのたけのわかみどり
よにぬけいてんいろはしるしも　安東菊子

しけるへきちひろのかけもまつみえて
おひ出にけりにはのわかたけ　樋口夏子

おひそめしにはのわかたけほどもなく
たかきかけともなりぬへきかな　柳田貞子

みな人のめてにしにはのわかたけの
枝葉さかえんなつはきにけり　安藤ふみ子

あさな〳〵みるなつことに生たちて
まき葉ひらけしにはのわかたけ　坪内銑子

遠からすやとるすゝめや多からむ
ことしおひたるにはのわかたけ　中村禮子

生いてしいさゝむらたけつゆおひて
なひくもすゝしにはの朝かを
堤 ふさ子

まとちかくひとむらおひぬことし竹
ことしの夏はすゝしかるらむ
森山 いと子

わかたけのよにぬけいてし一ふしは
をしへの庭のひかりなるらむ
片山 鑑子

やかてまたちひろのかけとなりなまし
まき葉ひらけしにはのわかたけ
關 幾子

かきりなき千ひろのかけやこもるらん
ひとふしたかしにはのわかたけ
青木 千代子

ほともなく千ひろのかけやそふならん
根さしことなるにはのわかたけ
長谷川 直

いつこまてのひむとすらんおひしより
おやにおとらぬにはのわかたけ
清水 田鶴子

ぬけいてんふしいちしるく見ゆるかな
ことしおひたるにはのわかたけ
高田 幸子

としことに生そふにはのわかたけの
みとりすゝしき夏は來にけり
山本 かん子

たけたかくなりにけるかなたけの子の
わかにはなから見もせさるまに
田邊 泰一

生出しにはのわか竹ことの葉の
すくなるふしのしるゝともかな
仝 きみ子

いつしかとまき葉ひらけてわさ風に
そよくもすゝしにはのわかたけ
仝 靜子

わさゆふにのひたつにはの竹の子に
まなひのみちもならひてしかな
櫻園 龍子

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第三百八十號

明治二十七年五月十九日發兌

社說

戲曲及び演劇の改良

近頃ろの文學界大躰の趣勢は、戲曲及び演劇の改良を催促するの一事にあり。凡そ文學者と云へば、新趣構の台帳一つ二つを試みにも作らばやと思ひ立ち、亦、苟くも文學上の新聞雜誌と云ば、何か此等の事に關係せる談議を多少掲載せでは相濟ざる如くに感覺するの躰、今時おしなべての流行なり。歌舞妓の起原は女にかゝわりあり。淨瑠璃の初作も婦人の手によりたり。其が盛衰進退も亦た過半女子が好惡によるとなどを念ふときに於ては、如今文學界の新方向に對する婦女子が關係は淺からずと云ふべし。況んや、戲曲及び演劇が人心に於ける影響の力量につきては、文學美術のうち、他に之に過ぐるものありとも覺えず、徇ほ一般世人の好尙、趣味、風俗等を支配するの上には、其驚ろくべき結果あるとを慮ばかるの時に於てをやも今に方つて、愚見寸言を吐露するは、蓋し當を得たるの責任なるべし。

凡そ改良論ほど尤ともらしき不尤の説多きものは少なし。局外に居て當路の仕方を評するは、元來雜作なきとなれば、情實を顧りみず、方便を慮ばからず、こゝに斯くと定むれば、結果忽然としてすぐさま天外より落下すると意わんほど、調寶にして容易きとはあらず。此故に、改良論は、皆な活潑高尙にして、至つて公平らしく見ゆるものなり。而して、斯く見ゆると同じ度合ひに於て、其が實際の成就を望まんとは、惣じて難きものなり。

世上に聞ゆる改良論のうち、先づ演劇に關するものの談議を考ふるに、此は論者自身が觀て慰さみと爲し得るほどに世上一般の雅臺を變えんとするにあるか。抑そも普通觀客の好みを參酌しての設計なるか。頗ぶる疑わしきものあり。論者は、素より見功者にして亦た口巧者の先覺なり。頭腦に理想あり、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

眼中に人なし、意匠の高雅にして趣味の超凡ならんとは言ふ迄もなしと雖ども、世間本來此流の觀客幾人かある。もし此論者にして一と興行を買ひ切り、客の入りに頓着せしめず、すべて此方にて利得を獲さすべしと言ひ玉ふほどの大贔客にてあらば、其注文のまに／＼改良するの相談或ひは纒まるべし。然るに、座元は說法の爲めに芝居營業を爲にもあらず、見物は演劇改良に奉公盡忠すべき者にもあらねば、一般の人氣に適はずして、客の入と錢のもうけとあらざれば、此の改良論を實地に施行せんと難しと云ふべし。

若し過去の歴史を念はずして直ちに現在の事實を露提し、之を單に純平たる理屈の上より穿鑿すれば、世上の物事何れかおかしからざるべき。花道の眞中に突つ立つて山路に行く樣をむと稱し、座つたまゝに廻り舞臺が廻り出し、愁歎場の如きをばに優々として舞ひかなで、二人意中を相示すのひめごとに朗々他の歌ふものあり、桜の下より人間がヰイ／＼せり上げらるるなど、悟つて見れば總べて拙劣極まれることなりと斷ずも、もし悟つて人事を見て而して其儚々なしからざるもの許かある。況して、事は所作にあり、望みは美術にある者のを。無きことを有りと見せ、夢幻を現實に象どつて、而して、人を樂しませ、心を風雅に寄せしむるとあらば、既に可らずや。今の演劇は、人形芝居の發達なり。故に役者に人形らしきこなしのあらんと明白なれども、之を非るは愚なり。何んとなれば今の見物もかた此を觀て發達し、兩々相ひ緣んで、凡そ演劇と云ふものは大抵かゝるものよと許し、其の間すでに一種の觀念を團結したれば也。されば、之を觀る時は、理屈にて冷評するほどにあらず、多年の作想連感、見聞の間だより爰生發發し、現に悲しさに堪へず、面白さに堪へず、おかしさに堪へず、腹立しさに堪へず、すべて舞臺一面の所作に呑込まれて、役者を活潑の活人物と思ひ做すと、現今普通の觀客が常態なり。柝聲丁々、幔幕一下、忽然として悟れば則はち泣いたるもおかしく、怒つたるも馬鹿らしく、眞とに是れ一塲の狂言にてありしと思はんと勿論なり、冷評は則はち此時にこそ起るべけれ、吾等が舞臺の所作に對ふときは、かゝる不忠實の觀念あるとなし。今の改良論者が大ひに掛念せらるるほどの事はなきもの也。此等を心配して改良の鋒先を向けらるるは、寧ろ餘計の骨折と云ふべし。

左れば、今の演劇改良論なるものは、單に文學專門家の改良論なり。其議論は、如何にも高尚なれども、之を實地に施こさんと、固より難し。これ、一般見物が、論者ほどに今の演劇を苦にせず、今日のまゝにて尤して不都合なしと安んずるが故にて、隨つて入の多きを希ひ座元及役者に於て論者の設計に從がふと能はざるの由緣による。但し、一般見物の安心滿足は、たとへば田舍ものが、頰を冠ぶり、赤ゝすそを現はして、裝ほひの甲頂なりと誇るにひとしく、美の觀念の至つて低きものなるべし。所云る改良論者より之を見れば、憫然至極の事にて、濟度救導の御志一と方ならず、淚をこぼして之を高くせんとの御心掛あらんと勿論なり。故に、かゝる論者は、演劇改良の爲めの豫言者なり。言わば、此社會のルッサウなり。道破開誘の高說あらんと當然の事とは言へども、さりとて收利を專ばらとする芝居興行者に、此の預言を申しまかせ、其行なはざるを見て則はち罵しるに至つては、少しく當を得ざるものにあらずや。預言者は、野に於て叫ぶべきものなり、商店の番頭をして代つて演說せしむるとを、聞かず。今の改良論者が、其理想を直ちに現舞臺に實行せしめんとするは、やゝ不當の所望なりと思はる。

然し乍ら、改良論者は言はんとす。吾黨の改良論は、左程に法外脫俗したるものにあらず、凡そ現在に實行し得べきほどの標準に於て論を立てたるものぞと。可なり！然るか。左らば、實際に所望すべく亦實際に行われ得べきほどの改良は、到底今の改良論の半ばにも過ぎざるべし。一言すれば、芝居茶屋の取締又は中合規則を今一段改良して、見物に便利と經濟とを與へ、今少しく廉價に且つ自由に遊觀の出來るようにし、舞臺の道具立は、追々精巧をつくし。所作には、卑陋なる事、野蠻なる事を成るべく減じ。主從、親子、夫婦、兄妹、ともに觀て恥かしくなきように趣構し。役者を追々交際社會に出だして、自から責任を感ぜしめ、隨つて品位人物を作らしむるように導びくなど、極はめて有益なる改良策ならんか。

論者もし此等三四の所望を聞かば、小量の注文低きと無きに同じとも言はんなん。然り、眞とに小量の注文なり。左れど其行はれべき分量の極めて小さきを思はゞ、所望亦安くんぞ小ならざるを得んや。憶ひ起す、前年演劇改良會の勃興せし

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

比や、外山正一、末松謙澄諸氏の英氣六合を吞吐せりと云ふべし。櫻痴居士が、ポリチカルをポエチカルに、轉ずと揚言して路に入つたる初は、意氣壯烈、蓋し今日の比にあらざりしならん。然れども、美の觀念太はだ低き見物を議員となし敎育少なくして習慣多き役者を政府員とし、收利一方の座元を大藏大臣として扨て一演劇を奏せんとす、其の政治の、理想の如くならざるは勿論なり。此は、世人を相手として事を爲したるものの皆知る所ろなり、何んぞ必らずしも演劇にのみ其の例外を求むべけんや。

然し乍ら、今の改良論を無用なりと言ふにあらず、其行れがたきを同もに歎ずるのみ。左れば、志凡ならず精神非常なる改良論者は、自から預言者なり、改革者なりと覺悟し、其說は、當代の舞臺には行われがたきと勿論なりと自認し別に發表の途を他につくつて、徐むろに、見物を敎育し、役者を敎育し、而して后ち演劇を實地に改良するの大勢を逍ひき來るべし。其法たる、先づ新戯曲を作するにあるか。戯曲は、帋上の演劇なり。必らずしも團左衞五を要せず、大任の入りを求むるに及ばず、先づ以て千百の讀者を得るに安んじて、趣味好尙の改良改革を漸次徐々にもとめ、梅蕾の開くると二つ三つ遂に春來り、星辰のかくるると四つ五つ遂に旭日出るの大進步を待つべきもの歟。之を演劇改良の爲の、至當の順序、着實の順序、結果あるの順序とす。此の順序に順つて安んずるを改良論者の平和と言はん。躍起運動罵言絕望は何の益もあるとなし。

文しらべ

名媛百絕（中）

万物外史輯

七言

○唐

題ニ隱霧亭一　　魚玄機

浣花秋‐月入ニ詩‐篇一、白日靑霄是散‐仙、空擁ニ珠‐簾一不ニ垂下一、長移ニ一‐榻一對ニ山眠一。

江陵愁望寄ニ子安一

楓葉千枝復萬枝、江橋掩映暮帆遲、憶君心似西江水、日夜東流無歇時。

會仙詩　　葛亞兒

彩鳳搖搖下翠微、烟花漠漠遍芳枝、玉窓仙會何人見、惟有春風仔細知。

贈遠　　薛濤

芙蓉新落蜀山秋、錦字開緘總是愁、閨閤不知戎馬事、月高還上望夫樓。

十離詩

元微之使蜀、嚴司空遣濤往侍、後因事獲怨、遠之、濤作十離詩以獻、因復善焉、

馴擾朱門四五年、毛香足淨主人憐、無端咬着親情客、不得紅絲毯上眠。犬離主、

雪耳紅毛淺碧蹄、追風曾到日東西、爲驚玉貌郎君墜、不得華軒更一嘶。馬離廐、

隴西獨自一孤身、飛去飛來上錦茵、都緣出語無方便、不得籠中再喚人。鸚鵡離籠、

出入朱門未忍拋、主人常愛語嬌嬌、銜泥穢汙珊瑚枕、不得梁間更壘巢。燕離巢、

爪利如鋒眼似鈴、平原捉兎稱高情、無端竄向青雲外、不得君王臂上擎。鷹離鞲、

戲躍蓮池四五秋、常搖朱尾弄銀鈎、無端擺斷芙蓉朶、不得清波更一遊。魚離池、

越管宣毫始稱情、紅箋紙上撒花瓊、都緣用久鋒頭盡、不得羲之手裏擎。筆離手、

蓊鬱新栽四五行、常將勁節負秋霜、爲緣春筍鑽牆破、不得垂陰覆玉堂。竹離亭、

皎潔圓明內外通、清光似照水晶宮、都緣一點瑕相穢、不得終宵在掌中。珠離掌、

鑄瀉黃金鏡始開、初生三五月徘徊、爲遭無限塵蒙蔽、不得華堂上玉臺。鏡離臺、

敘別　　崔萱

碧池漾漾春水綠、中有佳禽暮棲宿、願持此心永相貽、祇慮君情中反復。

迷香洞　　史鳳

洞中飛瓊佩羽霓、香風飄拂使人迷、自從邂逅芙

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

蓉帳不數桃花溪水西。

紳雞枕

枕繪鴛鴦久與棲、新裁霧縠鬪神雞、與郎酣夢渾忘曉、雞亦留連不肯啼。

戲贈　　崔仲容

暫到崑崙未得歸、阮郎何事教人非、如今身佩上清籙、莫遣落花霑羽衣。

閨情　　常浩

門前昨夜信初來、見說行人卒未廻、誰家樓上吹橫笛、偏送愁聲向妾哀。

偶居　　李冶

心遠浮雲去不還、心雲併在有無間、狂風何事相搖蕩、吹向南山復北山。

長門怨　　劉媛

雨滴梧桐秋夜長、愁心和雨到昭陽、淚痕不學君恩斷、拭却千行更萬行。

其二

學畫蛾眉獨出羣、當時人道便承恩、經年不見君王面、花落黃昏空掩門。

答王軒　　苧羅川女

高花巖外曉相鮮、幽鳥雨中啼不歇、紅雲飛過大江西、從此人間怨風月。

白蠟燭詩代外贈人　　孫氏

景勝銀缸香比蘭、一條白玉逼人寒、他時紫禁春風夜、醉草天書仔細看。

代外贈人送酒

謝將清酒寄愁人、澄徹甘泉氣味真、好是綠窗風月夜、一杯搖蕩滿懷春。

寄夫　　陳玉蘭

夫戍邊關妾在吳、西風吹妾妾憂夫、一行書信千行淚、寒到君邊衣到無。

和白公詩　　關盼盼

北邙松柏鎖愁烟、燕子樓中思悄然、自埋劍履歌塵散、紅袖香消已十年。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

岡山孤兒院を訪ふ（第二）

櫻井生

○岡山感化院

昨年九月石井氏は、孤兒院内に出獄者感化院を設立するに至りたり。現時同院にある出獄者は其數九名にして、主として製筵に從事し、彼等が主任監督者は甞て盜を行つて、獄窓に呻吟したる渡邊氏あり。予石井氏に問ふに、彼等出獄者が時に悪心を起して災をなし、或は又孤兒を誘惑するとなきや甚麼を以てしたるに、氏の答へによれば、彼等は皆孤兒等が制裁の下に在りて、悔悟の色を示し、また彼等が罪悪に陷りたる所以のものは、之れ彼等に切なる同情を寄するものなかりしが故にして、彼等は大抵慈母を喪ひて、孤兒の境遇に沈淪せしものか、或は繼母の爲に苦しめられたるものかにして、良母なきとは罪人を造るの主因なれば、今日にても彼等の爲めに心よりの同情を表さば、情ある人間の事故善心に復歸せしむるは敢て難きに非ずと、石を化して麵包となすの力ある神は、必ずや堅信なる石井氏を通じて、出獄者の徒をして、善良なる國民たらしめ給ふべし。

○孤兒院の起原

石井氏の此大事業を起す、決して偶然に非ず、其偶然に非ざるとの秘密は、近來に至りて大に氏の裡に破れたり。

氏は日向の人、年齡十五歲にして笈を東都に負ひたりしが、常時は故岩倉右府國柄を執りて、樞機を左右し、樺太島事件正に沸騰し、國事多端の節にして、年少の輩漫りに國政を可否するの折柄なりければ、氏もまた此渦流中に投ぜられ、遂には成す處あらんとして、故山に歸りしは、十三年の春なりしとか、故國に在りては、年少と會して、共に國事を談じて、扼腕撫拳するを事とせしが、仝年五月十二日の夜、氏は一の奇夢を感じたり、夢中氏は數名の巡査の捕縛する處となりて、警察署と思しき處に護送されて其の白洲に於て糺問されつ、

また他の處の白洲に遷され、白洲より白洲と、四五ヶ處に轉送の上、調を受けたる後、放免されたる事を明かに夢見ぬ。目覺めてより奇異の念に堪へざりしが、翌朝隣家に遊び居たりし時、豈に圖らん、夢中に現れたる如き二名の巡査は、氏が寓所を差して、一人は前門より、一人は後門より闖入して、氏を捜索し、遂に氏は縲絏の辱めを受くるに至りぬ。蓋し氏が其の數日前に國政論一篇を草し、又朋友と放論したることの探偵の聞知する處となりたるが爲なりしといふ。捕縛せられてより、宮崎警察署に護送せられ、前夜の夢と同じく、白洲にて糺問され、又此處より他處に移されて、調べらるゝと四五次、終に鹿兒島警察署にまで、轉送せられ、後七月に至りて、嫌疑晴れ放免せられたり。此間殆んと六十餘日、此時氏も實に奇異の念に堪へず、六十餘日に於て起るべき事件を一宵の夢裡に前感したる事は、何者か不思議の力の己が上に在るに非ずや、かゝる苦厄を受くるも何か理由のあるとならんかとの疑念を抱き始めたり。氏は又獄裡にありて、無聊に堪へざるより、手裡の皇朝名家史論を繙いて、青山延于が豊太閤論の劈頭なる孟子の語『天の將に大任を是人に下さんとするや、必ず先づ其心志を苦しめ、其筋骨を勞し、其體膚を餓し、其身を空乏にし云々』の語に至りて、心竊に慰撫する處ありたりといへり。十五年氏は醫師某氏より基督教を聽き眞の神は常に我等の上に在して、支配なしたまへるとを知りて、十三年以來の疑團やゝ解けんとし、其醫師は氏に勸むに岡山に出でゝ醫學を研究し、かつは金森通倫氏より、基督教を學ばんとを以てしたり。氏は其諭に從ひて、岡山に赴きて、醫學校に入學し、同校長等の厚意によりて學資を得、勉學に怠らざりしが、此時よりして、無告の孤兒を救濟せんとするの念は稍氏の胸中に燃え始め、十八年夏期病を養ふの序を以て故山に歸るや、三四の孤兒を集めて、之を養育したり。二十年に至り、氏は再び岡山醫學校に在るの傍に、一の孤兒院を設立して、之に從事するとゝなれり。蓋し氏は孤兒を救濟するを以て、自己の天職なりと信ずるに至りたるが故に、醫學校を卒業し、開業醫となりて、其收入金を以て孤兒院を維持せんとするは當時の思想なりしなり。然るに此頃かのジョージ、ミユラー氏の我國に來遊するあり、石井氏は同氏に接して、其英國に於ける孤兒院事業をきゝ、感觸措かず。ミ氏

に倣ひて、この事業の爲に万事を擲ち、一片の信仰と、祈禱斷食との力によりて、孤兒を養育せんとの念を起して、廿二年一月、遂に父母朋友の怒りを顧みず、是迄多年氏に望みを屬したる醫學校長の憤懣をも意とせず、數年研究の餘に謄寫したる幾多の書類を灰燼の中に葬り、一身を犧牲として、孤兒院事業に從事することとなりたり。其時よりして今日に至るまで五年有餘の間、信じて神に求め、天下の慈善家の惠送を待ちて、幾百の孤兒を養育し、其事業は愈々進歩して、氏が信仰いよ〳〵堅し、氏いへり、もし彼時書籍を燒いて、醫を斷念せしに非ずんば、この事業は既に失敗し了りたるならん。堪へ難き困難の時には失望して醫に遁れたりけんも、孤兒院を以て唯一の事業となしたるが爲に、幾多の困難にも能く堪へ來りて、今日を致すことゝなりたりと。

○人生の半面は奇跡なり

石井氏は神の力によりて万事は成し得らるべしと信ぜり。手に一厘の金なくとも、信じて祈る祈禱は百万の富にも優るものなりと確信せるが故に幾百人の孤兒たりとも、狐疑躊躇することなくして養育せんとせり、氏が神の力によらば何事にても成就し得べしといふことを知りたるは、未だ基督敎徒とならざりし以前にして、なほ僅に十一歳許の頃なり、其頃氏は幼耳にキリシタンの神に祈らば何の願にても愜ふべしといふを隣人よりきゝゐたるが、或日の事とか、朋友數名と河邊に釣を垂れたるに、氏のみの針には一尾の細鱗もかゝらざりければ、此時ふとキリシタンの神に祈らば何事にても叶ふといふことを思ひ出したるより、餌を針に差しつゝ、譯も知らぬまゝ神に祈念して、之を水中に投じたるに、乍ち魚を獲たれば、夫れより常に此法を行ふに、其都度魚を獲ざることとてはなかりしといふ。其後また從弟某氏と共に釣魚を試みたるに、氏は例の法によりて、多くの魚を獲たるに、從弟氏の針には一尾ものぼることなかりし故、石井氏は彼に敎ふるに神を祈るべきを以てせり、其敎によりて、從弟氏も試みたるに乍ち魚を獲たりとか、其日の事は今日も時々兩氏間の談話に上ることありて其奇を稱するありといふ。幼時多くの魚を釣らしめたる神は、今日幾百の孤兒を與へて其養育を托せり、氏が經歷事業は實に奇異解すべからざるもの多く、氏も自から稱して

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

其事業を奇跡なりといへり。今もなほ行はれつゝある神の奇跡は之を岡山孤兒院に於て見るなり。氏曰く、人往々奇跡の有無を議論するものありといへども、知らずや人生の半面は常に奇跡なることを。もし奇跡あるを疑ふものあらば、此孤兒院に來りて、一ケ月の間其會計事務に從事し見よ、旦に一厘の餘剩を見ず、一毫の收入の目途もなき、帳簿の上に一日の出納を記して、夕に之を總計せば、時になほ餘りあるを見ることあり。嘗て奇跡なしといへる一青年ありしが、之に此會計事務を執らしめたれば、其者は此帳簿の上に現れ來る不思議に驚きて、或時の如きは驚愕の餘絶倒したることさへありたりと、氏が求むる處は必ず氏に來らざるはなく、氏が人相學の書の必用を感ぜしときには、米國より新版の人相學書を郵送し來りたり。エミールを思ふや、乍ちエミールを得、ミユーラー氏の傳記を欲せしや、人あり之を寄送したりと、氏は信仰の力によらば、泰山を挾んで北海を越えんとも、敢て難きに非ずとせり。神は必ず孤兒を養ひたまふべしと信ぜり。故に食なくんば、よし餓死せんも氏等及孤兒は食はざるなり。金錢なきが爲に一度借財をなさんか、事業は忽ち瓦解すべし

と氏はいへり。神の力に依賴して、手裡に落ち來る惠送金のみを以て、幾百の孤兒を養ふ、氏の信仰は實に驚くべきかな。徳孤ならず必ず隣あり、天下到る處此孤兒院にむかつて同情を表するの士女多く、呼はつて求むるに非ずして、六百餘圓の月額經費敢て滯りを致すことなし。之を奇といはずして他に何者か奇なる、岡山孤兒院は實に當代の一大奇跡なり。

○炭谷小梅女史

石井氏曰く、人もし一事業を成さんとするに當り、もし同情を表する朋友のあるに非ずんば、其業の成功覺束なしと、氏の爲には實に炭谷小梅氏なる堅信の婦人の朋友として在るあり。石井氏をして其信仰を堅持せしめたるも、此事業の中途に横たはれる幾多の困難に堅忍不動ならしめたるものも、實に炭谷女史の力なり。石井氏自からいはく、我此孤兒院の事業は實に我事業に非ずして、炭谷氏の事業なりと。

○山陽新報の照討

岡山孤兒院月報第七號を讀みたるものは知らん、岡山に山陽

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

新報なる一新聞あり。毒筆を逞しうして石井氏を傷けんとし、孤兒の爲に一生を捧げたる、此義人を呼んで僞善者といひ、詐僞師とせり、天下の耳目を以て自から任ずる新聞紙にして、現在其眼前に行はれつゝある慈善の事業を親しく見聞しながら、抑も何の爲にする處ありてか此語をなす。筆鋒も之を制せずんば、かくの如く荼毒を逞しうするにいたるものか。世には筆をとりて此類の言をなすもの實に多し。予は彼等が文昌皇帝惜字寶詮十二則を讀んで、内に顧みる處あらんを望む。

雜録

翁丸

清少納言

うへに侍ふ御猫は、かうふり給はりて、命婦のおもとゝて、いとをかしければ、寵かせ給ふが、端に出でたるを、乳母の馬の命婦、あなまさなや、入り給へとよぶに、きかで、日のさしあたりたるに、うち眠りて居たるを、威すとて、翁丸いづら命婦のおもとくへといふに、まことかとて、癡物走りかゝりたれば、おびえ惑ひて、御簾の内に入りぬ。朝餉の間にうへはおはします。御覽じて、いみじう驚かせ給ふ。猫は御懷に入れさせ給ひて、男ども召せば、藏人忠隆參りたるに、この翁丸打ち調じて、犬島につかはせ、唯今と仰せらるれば、集りて狩りさわぐ。馬の命婦もさいなみて、乳母代へてん、いとうしろめたりと仰せらるれば、かしこまりて、御前にも出でず。犬は狩り出でゝ、瀧口などして追ひつかはしつ。あはれ、いみじくゆるぎ歩きつるものを。三月三日に、頭辨、柳のかづらをきさせ、桃の花かざしにさゝせ、櫻腰にさゝせなどして、ありかせ給ひしをり、かゝる目見んとは、思ひかけゝんやとあはれがる。御膳のをりは、必ずむかひさぶらふに、寂寥しくこそあれなどいひて、三四日になりぬ。ひるつかた、犬のいみじく泣く聲のすれば、なにぞの犬のかく、久しくなくにかあらんと聞くに、萬の犬ども走り騒ぎとふらひにゆく。御厠人なるもの走り來て、あないみじ、犬を藏人二人して打ち給ふ。死ぬべし。流させ給ひけるが、歸りまゐりた

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

るとて、調じ給ふといふ。心憂のことや、翁丸なり。忠隆實房なんど打ちつといへば、制しに遣るほどに、辛うじてなき止みぬ。死にければ、門の外にひき棄てつといへば、あはれがりなどする。夕つかたいみじげに腫れ、あさましげなる犬のわびしげなるが、わなゝきありけば、あはれ丸が、かゝる犬やはこの頃は見ゆる、などいふに、翁丸と呼べど、耳にもきゝ入れず。それぞといひ、あらずといひ、口々申せば、右近ぞ見知りたる呼べとて、下なるを、まづとみの事とて召せば參りたり。これは翁丸かと見せ給ふに、似て侍れども、これはゆゝしげにこそ侍るめれ。又翁丸と呼べば、悦びてまうで來るものを、呼べど寄りこず、あらぬなんめり。それは打ち殺して、棄て侍りぬとこそ申しつれ。さるものども二人して打たんには、生きなんやと申せば、心うがらせ給ふ。暗うなりて、物くはせたれど食はねば、あらぬものにいひなして止みぬる。つとめて、御梳櫛に參り、御手水まゐりて、御鏡もたせて御覽ずれば、侍ふに、犬の柱のもとについ居たるをあはれ昨日、翁丸をいみじう打ちしかな、死にけんこそ悲しけれ。何の身にかこのたびはなりぬらん。いかにわびしき心地しけんとうちいふほどに、この寢たる犬ふるひわなゝきて涙をたゞ落しにおとす。さはこれ、翁丸にこそありけれ。昨夜は隱れ忍びてあるなりけりと、哀れにてをかしきこと限りなし。御鏡をもうちおきて、さは翁丸といふに、ひれ伏していみじく泣く。御前にもうち笑はせ給ふ。人々參り集りて、右近内侍召して、かくなど仰せらるれば、笑ひのゝしるを、うへにも聞し召して、渡らせおはしまして、あさましう犬なども、かゝる心あるものなりけりと、笑はせ給ふ。うへの女房たちなども、きゝに參り集りて、呼ぶにも今ぞ立ちうごく。御顏など腫れたンめり。物調ぜさせばやといへば、終にいひあらはしつるなど笑はせ給ふに、忠隆きゝて、臺盤所のかたより、まことにや侍らん、かれ見侍らんといひたれば、あなゆゝし、さる者なしといはすれば、さりとも終に見つくるをりも侍らん、さのみも得かくさせ給はじといふなり。さて後提勘許されて、もとのやうになりにき。猶あはれがられてふるひ泣き出でたりし程こそ、世にしらずをかしく哀れなりしか。人々にもいはれて泣きなどす。

米愛水子が失愛犬記を讀みて、そゞろに哀れなるまゝに、清少納言が翁丸の事を想ひ、枕草子の一節をこゝにさり出しつ　　松　菜

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

逸事

○○竹の操

第三枝

従六位　枕岳哲士

女史頗る經濟の美徳に富み常に絹を身に纏はず其贅費を節し華美を嚴省し清儉質素なるは如斯る富裕なる貴孃には實に稀に見る所にして轉感賞に堪へず曾て某令孃と相携へて住吉神社に詣でんとす難波「ステーション」に至れば上等待合所に絹絨の「オーブルコート」より燦然たる黃金の鎖を現はし寶石の貴環指間に曉の明星の如く晃々として光らし傲然として扣へ居る者是を龜壽郎氏とす遂に倶に仝神社に詣りて歸る女史慷慨の淚を清袖に包み聲に咽んで曰く良人が胸間の光り旭日大綬章に劣ると氏是より翻然節を折て贅飾を用ひず。

是より先き龜壽郎氏は曾て結約の佳孃に後れ鬱々として樂まず既にして大に其氣を花柳に霽らし其極沈淪するに至りて巨萬の財を徒消し菊水大盡と稱せらるゝに至る蓋し氏の紋章に因みたるなり女史と婚するに至りても遊廓の癖猶止まず然るに其以來常に花菱紋を用ふ廓中又花菱公と云ふを光老女之を女史に問ふ女史曰く良人花柳に遊ぶ庶幾くは浩然の氣を養はん事を只恐るは浪費と病毒なり其紋章を代へたるは菊水の紋は祖公が千兵萬馬の中に風靡せしめ給ひしもの精忠の標準となりたるものなり今流れも濁る浮川竹の賤しき婢輩の手に觸れしむ可きものに非ず故に之を代ゆと。

女史弟良規の苦學を助くる寒夜熱宵孜々勵精して怠る事なし寛嚴宜しきに叶ひ良規の爲には天晴れの萱堂公たり爲めに良規の學識發達する事非常なり又曾て其弟の爲めに日本千字文を作り且つ自ら書す文辭輕妙筆痕健活藤澤南岳氏見て大に驚嘆せり葉櫻とよし孃今之を請得て所藏す。

曾て賊あり戸を排して入る竊に見れば賊白刃を閃かし龜壽郎氏の寢室に近づく急ぎ氏に通ぜんとすれども賊中間に隔たりて氏の眠りを醒すに由なし女史則ち側邊の毛布を取り後ろより足音を忍んで白刃を毛布に包み力を極めて其柄先を握り大聲にて火事よ火事よと叫べは賊は倉卒刀を捨てゝ逃げ去れり其機敏概ね斯の如し。

女史の家老女と婢一名の屋のみ父なる伯爵曾て浪華に來り其

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

寓を訪ひ其生活の程度の低きに過ぐるを見小間使の一名も雇入ん事を勸められしが女史は面を正し如斯ても海防費でも献ずるならば率先致すべしと伯爵は又云はず。

隣家車夫在り足に負傷して起つ事能はず家計忽ちに窮し群兒の食を乞ふも給する能はず其車夫大に之を嘆ず其妻の曰く心安かれ妾は錢設けすべしと車夫は不本意の景色ながらに詮術なげに諾ひたり青谷家の婢是を女史に告ぐ女史則ち其妻を喚んで曰く和女働ひて其家計を爲さんと其心底いとも感ずるに餘りあり然れども當時利を得るに難く中々女の弱き腕にて一家五人を養ふの收入ありとは思はれず知らず其業は何を爲すや妻漸色ありて答へず女史は其となく淫賣などを爲す可らざるを諷諫し婦人は第一操を守る可き眞理を諭し懇切に其心腦を貫きたれば其妻大に悟り實を告げて謝しければ則ち白米一斗を與へて實業を勵ましむ故に其妻遂に淫賣を爲さず女史の博愛心に救はれて操を全ふしたり。

西國の漢學者に畫を能くするあり其名聲大に行はれ曾て來りて壽鄰郎氏に面談を求む時に氏東上して家に在らず女史婢をして云はしめて曰く方今國家多事大丈夫が爲す可き事積んで山の如し何の暇在つてか閑人を眞似んや足下若し意あらば國利的事業に奔走せらるべし其時は相會して談すべしと。

つれ〴〵草

偶錄　識不識

花の如くなれよ、雪の如くなれよ、雲の如くなれよ、また風の如くなれよ、而して虛靜寂寞、而して無爲恬淡、假令へば富嶽絶頂の月の如し。物來て應じ、已むを得ずして後動く。我々を知らす、然るを況んやその他をや。是に於て人の非なく、また鬼の責もなし。

好む所に從て動き、止る所に至て休す、我は我爲す所を爲さんのみ、腦間また一點の雲翳なし。

散らんか、飛はんか、飛んで跡を止めざるべく、散てまたその影を存せす。只夫れ自然、只夫れ自由、制限もなく、また束縛もなし。

述懐　無名子

咲きて散り

散りてまた咲く櫻花
定めなきこそ定めなれ
いざや我身も飛鳥川
水のまに〳〵舟浮けて
遊び行かなん花の下。

曝背居記(其三)

市谷生

小日向生を市谷生と名のりかへて此居に移りし十二月の半ばごろなりき初めは雪の景色梅の匂ひを貪ぼり盡してまた異所に移らばやと思ひぬさて雪も見ぬ梅もちりはてぬいざやと思へどをりふしやう〳〵ふくらかになりぬる花の蕾と調やさしき鶯の初音とにほだされてこれをもよそに見捨んやとてとゞまりつ今は木々の梢一つらに青う見えて梅の核固まるばかりになりぬれど寐ざめの空に月をかすめて名のる一こゑ二こゑのあやしう身にしみて向ひの岡に節句の鯉の翻るまでたゆたふもおかし。

丘のふもとにて機織る音たえず聞ゆしめやかなる雨の日など田舎めきていとおもしろし唐の某が文に友どち打つどひしときそが中の一人の天下何の聲か尤心とまるべきと云ひ出しに他の一人の機聲をこそと答へぬと云ふことあり小日向にありけるころもをり〳〵聞しことあれどいつも梭のおと一つ一つにて心あわたゞしき心地せしをこれは二つゞゝうちていとのどかに趣深し。

一家隔てゝ隣に琴の音をり〳〵聞ゆその唱歌も拙なからねばあはれいかなる人のすさびにかとゆかしう思へりき軒の雫かすかに聞えて小雨打けぶりいとしめやかなる日をりにふれて

かきならすとなりの宿のことの音に
なくうぐひすも聲あはすらし

など口ずさみしことあり、ある夕そゞろあるきして外よりかへるさ家のほとりにてうらわかき娘とそが母ならんと思はるゝ老女とに行あひぬ路のぬかるみをば老女の抜足に腰打かゞめて歩むを己れに會釋しぬと思ひあやまりて丁寧に禮かへしつやがて二歩三歩行き過ぐるころ娘けうとき聲して打笑ひぬ己れのあやまりしがをかしとてなり年若き女は箸のまろぶにも高笑ひすといへどあまりにはしたなきふるまいかなと興さめぬる心地しぬあとにて此娘すなはち琴のあるじなりと知り

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

て妙なる音は前に變らず聞ゆるものからなか〳〵に耳かたむくることも少なうなりぬ今にして思へばあかぬは鶯のなく音なりけり。

つれ〴〵なるをりにはあたりの女子など呼びつどへてはかなきざれ言云ひかはして慰むとあり己れ南に向へる梅が枝には實いくつかなれる、見ゆるかぎりにつゝじ幾本かある、靖國社の樅と番町のちゝの木といづれ高きなど言ひ出づれば思ひ〳〵に答へぬあるとき今庭の木に花さけるがありやなしやと問ひこゝろみしに皆なしといらふそが中にたゞ一人のみ棕櫚の木のいと高き梢に黄ばみたるものゝ見ゆるを目ざとく認めてかしこにこそ見ゆれとほこりがに云ひたついとおかしかりきこのごろいつの夕も云ひ出づるは今宵杜鵑なくべしやと云ふ問なりけり。

一生自笑間中過、
不レ爲ニ功名一也白頭。
小詩戲述幽居事、
後有ニ高人一識ニ此心一。

小說

橋松佳話

花園女史

第四回

ゆきあひの橋(中)

橋本つく〴〵ものかたりのやうをきゝて、さてもよには心の外の事あるものかな、八丈島の土着の民、めに一丁字もしらず、耳には浪のよる計うき世の風もしらじとのみおもひし父は、おもひの外なる達識才力具はる人物、たゞ我はこれのみならで、身の素性も華族の胤とか、操子もいかにおもてを和しけん、父にもこれよりの孝養は伴ひかへり來りてよりはふさはしきほどになして後の百年をおくり來らんと、父の上操子の上、おもへばおもへばわが身うれしく飛立ばかりに羽をのす心地、笑を目の中にたゞよはせており、父は徐に坐を立て黒板やうのものを取出て橋本に示し無人島とよばれし土地もか、く繁盛になり行き、いまでは家居も日本、西洋風に、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

瓦をふき、床もかまへ、見らるゝことゝなりたれども、むかしはたゞパアムの丸木に、棕梠の葉うち圍ひ、屋根とも壁ともして、海の沙をたゝみにかへ見るかげもなき野蠻の住居なりしぞやこれ此を見よこはこの表に鐫あるごとく千何百年てふ年に英國の軍艦が國王ジョーヂ陛下の名を以て、この島を其領地とさだめたるものなりかし、はじめ慶長の頃、いまだ鎖國の制度行はれさる折に小笠原家の支族小笠原貞頼が此島を發見して東照宮より領地に給はり、名をも小笠原島とて我日本に屬すべき土地なりしに、其後交通の道絶たりつるに再びまた渡海の目的ありしも、航路をあやまり成功なかりし内に外國にてはその打捨あるを幸に、かゝる企までありて、かのウエブといへるは英國のものにして、其後此島に住居をしめ、港々の案内をさせて、此銅板をも守護せしめられたりとは、當人よりもきゝたり、しかるに米國のものにて、セイポルといへるもの、こゝに移住を企て來り、また葡萄牙人にブラホーといへるも來住し、近々此南の方ラドローチンあたりより、婦人などをも移し來りて、全島の住人は男女凡て十餘人になりし折から、米國より日本へ使節を送り、和親交易の申入をなすにつきては、日本に於て拒絶なさば戰爭をも引出でなん、さる後には石炭の置場等に事かきて進退難からんと、その時の船將パリは、早くも此島に眼をつけ、これを占領して、かのセイポルが本國のものなるもて國旗をも渡して島のおきてなどものして、これに支配をいひつけたりしも、日本との事もやすらけく治りて、その後は米國より別段、手を入るることもなく島人は自然生の蘆粟より、砂糖をとり燒酒を製し、玉蜀黍甘藷咬𠺕吧芋などを作り、豚鷄などかひ、またはかり得し海鼈をいけ置て時々水など求るために來れる鯨獵船などに賣渡し、又は衣服調度などゝ交通してなりはひとなしたり、されど最前よりの行かゝりあればかのウエブはあへてセイポルの指揮に服さず、此洲崎村に割據してその妻一人を人民として一王國を搆へたり、しかるに文久のはじめに水野といへる奉行の渡來り、餘多の移住人即われらをも引率して役人衆をさへ置て一島の沙汰日本公儀の政となりセイポレもウエブもみな日の丸の旗かけによる身となりしに、再び引揚の沙汰起りて、又候もとのすがたに戻りき、此島の歴史は今更のやうにいはでもそなたはとくしりなん、老のくり

事と笑ひ給ふナ、此ときには若氣にまかせまけじたましひにかられて、一人その中に踏とまりはしたれどもはじめ八丈を船出せし頃、そなたの母が船見送りうちなく懷にねぶりゐつるがかくも大きく成しとおもはで緩り寐の夢にそのさまあり〱見てしのぶ涙に枕ぬらす夜もありしぞや今は交通絶たりし我國、再び相見んよしもなし、よしなきことしてけりと悔む心を鬼にして、かの公儀より給はりし船をもとでに一かせきと、身をこにして働き出し、今は此島にての古參ものと立らるゝ立野信天翁とその上島のなぎさにむれゐし島の名を名のりしも、あほうとや人はわらはん、けふそなたにめぐりあひてそのかみのことおもひ出ては、いかに其時のこゝろの邪見なりしか、そゞろにおそろしくおもふなり、それにもまして罪ふかきわか業、人には秘めてかたらねど親子としては、かくすに及ばず、此さんげの物語そなたならではきくものあらじ、さて前にもはなせしごとく、侍人衆の引はらひて後は、また無政府の有樣となり、この洲崎はウエブのに本村はセイポレ、大村はブラポーと三國鼎峙して戰ふことこそなけれわつかの小島も互に睨み合ふて權を爭ゝぞかしさ、されど此

洲崎村は港口の要地を占め、ことにウエブはもとよりの水先案内として、たまさか來れる獵船にもなじみ有り其上本村の碇泊場は山陰にて風浪を避くるにはたよりよしとも底には珊瑚礁ありて碇おろしがたく扇ヶ浦の方、暫時の停泊には都合よしとて船を留るものも多ければ、われもまたかの公儀より給はりし役所をホテルの樣にしなほして、船員の上陸、休息の所となせば繁昌ます〱加りて、洲崎村扇ヶ浦は、二見港の富を擅にして、予はもとよりウエブもます〱その富をましおさ〱隣國、本村、大村を凌ぎにき、しかるにあるとし、いつになき大風大つなみありてかのもとでとたのむ押送り船はもとよりかのホテルの建物はさらえ、船便をたのみて大金を出し、米國より買入かひたてし牛數頭は山よりおちて皆死しつくし、飼たてし蜂も種なしにしてこの信天翁その頃、信太郎といひしが身ひとつを遁れたるのみまたいかにくらさんと途方にくれたる折りしも初より心易くせしウエブの事とて、いまゝでそなたの商賣氣に疑すき、あまりに資本を運轉して、只管非常のもうけせんとの企てに意見せしはこの事なり、われはこの年頃積ところは多けれど、見らるゝことく家屋なり、なになり、もとのまゝにしてたゝふる

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

きビール樽の底にドルラルのたまるのみ樂しみとしたり、見給へドルラルは風もふき飛さず、つなみもたゞよはさず、もとのまゝにてかくあるなり、其許も今はそのさまにては過ゆきがたからん、いでとけなげにもかの樽底より取出してわれに與へしは貳百ドルラル、いつにてもまふけのありしおりにかへし給はれ、遠慮なく使はれよとの義俠心にはげまされ、いなみもせず、これを受て、いつしか此恩を報ぜんとおもへば其前よりも同じ土地の事とて商賣上の事、互に助け合しことありしが、今はひたすらウエブの爲になることあらば、心をつくし力をつくし、その益を計りたり、そのころのことなりけり、母島にはハムボルクのものなりとて、いづれの船より來りしが、カナカ産のわかき女子五六人、具して來りすめるものありけり、彼女子どもは妻ともし、妾ともし、折々は來泊する鯨獵船水夫などにまさなきふるまひせしめて、金貪るなどゝのうはさあり、もとよりおのが齡さへかぞへあたはぬカナカ人なれば物のわきまへあるべきならず、慰みものとなり、商賣ものとなりて、あしともくやしともおもはぬなるべし。

論説

嬰兒の精神及び其發達（其三）

竹内楠三

（四）感應の化分

嬰兒の身躰は常に種々の勢力によりて圍繞せらるゝものなり即ち光線、音響、熱、空氣、嗅氣、衣服の壓迫等は絶えず感神經の末端を刺戟せざるを得ず。又た内部には生理的變化起りて躰内に分布せる感神經を刺戟するものなり。而して此等の刺戟は腦中に傳はると雖ども、吾人が感覺する如く此れは光線なり、彼れは音響なりなどと明確に差別し得るものにあらず。各感神經の末端より來る無數の刺戟は相集合して混沌無差別の普通感情となり腦中に存するに過ぎず。是れ心情の未だ分化せざる原始の狀態にして、恰かも今日の太陽系が未だ開發せざる太初に於て万象を發現すべき原素混然として無差別の雲霧的狀態にありしものゝ如し。然るに斯の如き無差別の感情が差別的心情、即ち種々の觀念情緒などと分化するには如何なる經過によるものなるや。一種の靈力腦中にありて之れを組織するものなるか。否、決して斯る力存するにあらず。單一なる感應に固有の結合的性質によりて漸次分化して複雜なる心情となるものなり。感應に結合する性質あるは恰かも化學的原子に親和力あるが如し。一の原子と他の原子と化合するは決して他に之れを化合せしむる力ありて然かなすものにあらざるは何人も能く知る所なり。原子は極めて微細なるものなれば吾人の知覺し能はざるものなりと雖ども固有の親和力によりて同類相結合し、又た異類互に化合するを以て吾人の知覺し得る如き物躰をなす。例へば炭素の原子相

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

集まりて一塊の金剛石となり、水素の二原子と酸素の一原子と化合して水の一分子をなすが如し。之れと同じく單一なる感應は極めて微小なるものにして知覺すべからずと雖とも稍集して知覺し得べき感覺となり、或は異類の感應と雖ども或る境遇の下にあるときは結合して一組の感覺となるなり。又た原子の親和力には强弱の差あるを以て甲の原子と乙の原子と既に化合して一分子をなせるも、若し甲と化合すべき比較的に强き親和力を有する丙の原子或る境遇の下に於て之れと接近するときは甲は乙と分離して丙と化合するものなり。例へば鉛の一原子と硫黄の一原子と化合して硫化鉛となり天然に存し居るものなるが、今之れに鐵を近づけ强く熱するときは鐵と硫黄の親和力は鉛と硫黄の親和力よりも比較上强きを以て硫黄は鉛より分離して鐵の一原子と化合し硫化鐵を生ずるなり。之れ別に原子に分離力と稱する力存するにあらずと雖ども各原子の親和力に强弱の差あるによりて起る現象たるなり。之れと同じく單一なる感應にも結合力に强弱の差異あるによりて、既に甲と結合したる感應群としては乙と結合して甲と分離することあり。即ち心理學に所謂辨異作用なり。然り而して化學的原子の親和力によりて外界に種々の現象を觀る如く、單一なる感應の結合的性質によりて吾人の內界に種々の精神的變化を起すものなり。即ち感應の結合的性質によりて結合と分離の二作用を現はし、此二作用によりて嬰兒の腦中に存する混沌たる無差別感性は漸次に分化して、複雜なる心情となるものなり。左に感應の分化する形狀を略し然る後、複雜なる心情の發現を述べんと欲す。

(い)　類に基く感應の結合

外界の刺戟によりて絕えず嬰兒の腦中に存する漠然たる普通感情には種々の異類の單一なる感應混入せるものなれば、時日を經過するに從ひ、類を同くするものは互に結合して大なる一感覺となるものなり。即ち光線の刺戟によりて視神經より來るものは漸々集合して光と稱する一種の感覺となりて他のものより分離し、又た音響の刺戟によりて起るものは漸々集合して音と稱する一種の感覺となりて他の感應より分離するなり。斯の如き次第によりて種々異類の感覺、類に基きて結合し異類のものと畫然分離するに至る。是に於て識の差別漸次發達するものとす。社會上の譬喩を以て之れを說明せんに、新たに開けたる一の地ありて四方より數多の人民移住して一大都會をなすと假定すべし。其の移住せる人々は初め一の地方に群集するのみにて漠然規律なき集合体に過ぎず。然りと雖ども此集合体の中には種々異樣の性質、職業を有する人々混入せるものなれば、歲月を經るに從ひ、其性質を同くすること、職業を同くすること、又たは古郷を同くすること等によりて互に社交的結合を始め、各一小社會をなして漸と分離し而して最初無差別なりし集合体に差別を生じ整然たる秩序をなすものなり。東京の如きは既に斯の如き秩序を存するものにして、學生は學生、政治家は政治家、商人は商人と互に社交的結合をなし、又た古郷を同くする故を以て熊本人は熊本人と結合し青森人は青森人と結合せるなり。而して斯く社會的結合定まりたる上は新たに來る人々は直ちに己れの屬すべき社會に結合するを以て其社會は益增大となるものなり。之れ嬰兒の感應が類に基きて同じ色と同じ色と結合し同じ音と同じ音と結合し以て漸次心情の分化を生ずると同一の理をあらはすものなり。而して嬰兒の腦中に一たび斯の如き秩序生ずるときは新たに外部より來る刺戟は既に腦中にある一組の感覺と結合するを以て始めて此れは青なり彼れは赤なりと識別することを得るものとなす。若し此程度にまで分化

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

せざ中は外界の刺戟を受くるも明瞭なる感覺起ることなし。然るに斯の如き識別は何れの時期より始まるものなるやと云ふに、之れ吾人の答ふる能はざる所なりと雖ども嬰兒が觀念の連件を表出する以前既に腦中に於て感應の分化なかるべからず。而して觀念の連件が始めて現はるるは何れの時期なるやと云ふに、プレー氏、ダーウヰン氏及びプライエル氏等の云ふ所に從へば生后五ヶ月頃に至れば明かに觀察せらるゝものゝ如し。例へば生後五ヶ月位を經過したる嬰兒が其母或は乳母の顏を見て欣び又た己れの名を呼ばるゝ聲を聞きて耳を傾くるが如き是れなり。されば之れより餘程以前に於て腦中の組織生じ居ること明かなり。

（ろ）時に基く感應の結合

感應の結合するは單に類を同くするもののみにあらず假ひ異類のものと雖ども時の關係によりて結合するものなり、之れを細論するは實に興味あることとなりと雖ども甚だ複雜に涉るを以て唯だその大要を摘し二類となして左に畧述すべし。

同時の結合——同時の結合とは同一の時間に於て刺戟を受けたる異類の感應が腦中に結合するものを云ふ。吾人の觀念は全く此の結合法によりて生じたるものなり。嬰兒の腦中に於て同類の感應結合したるのみにては、之れ單に個々別々の感覺たるに過ぎずして未だ外物を知覺したるものにあらず。外物が始めて嬰兒の網膜を刺戟するや、之れによりて嬰兒の腦中に起るものは色の感覺あるのみ。又た時計の音が始めて嬰兒の鼓膜を刺戟するや單に音の感覺あるのみ。斯の如く個々別々の感覺孤立的に起るのみにして其間に未だ結合なきものなれば、一の感覺のみを以て此れはランプなり彼れは机なりと物躰の存在を知覺する能はざるなり。故に嬰兒には吾人が知覺する如き外物一として存在することなく、たゞ別々の感覺あるのみ。然るに時日を經るに從ひ、筋感、觸感、視感或は味感など互に結合して始めて物躰の觀念を得るに至る。例へば嬰兒が母の胸にありて乳を吸ふや、味感と觸感とを同時に經驗し又た其色を同時に見るを以て屡々之れを反覆するときは此等の三感覺腦中に結合して一組となり遂に其色を視るのみにて乳たることを知覺し得るに至る。而して嬰兒が漸々生長すると共に手足を動かし諸物を探り或は接觸し之れと同時に其色を感じ其音を聞きなどするを以て、種々異類の感覺結合して外物の觀念を生じ、單に其色を見、聲を聞くのみにて外物を知覺するに至るものなり。

繼續に基く結合——繼續に基く結合とは屡々甲の感覺と乙の感覺と繼續して起るときは此等の二感覺互に結合して一組の觀念となるものを云ふ。之れ上述したる同時の結合と共に發達するものにして知識の開發上共に重要なる要素なり。因果の觀念の如きは全く此の結合法より生ずるものと云ふべし既に述べたる如く未だ經驗を重ねざる嬰兒にありては腦中に活動するものは結合なき感覺のみなれば、外界の諸物に因果の法則ある如きことは夢にだも知らざるのみならず、己れが手足の運動は如何なる結果を生ずるやと云ふことすら知らざるものなれば、身躰に痒を感ずるも手の運動を利用して之を搔く能はず、又た己れが欲するものの目前にありと雖ども手を伸ばして之れを取る能はざるなり。然るに漸次偶然の經驗を積み或は母、乳母等の教育によりて、手の運動によりて起りたる筋肉感覺と手の位置より來る視覺と結合し、又た一物躰に觸るゝときは抵抗の感覺起り、之れを取りて口に入るゝときは味感を覺ゆる等の各感覺の繼續を經驗し而して此等の感覺は繼續的結合をなして一組の觀念を形造るものなり。是に於て始めて行爲と其結果との觀念生ずるに至るものとす。斯

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

る結合は生後五ヶ月にして判然認め得らるゝものゝ如し、其一例を擧げんに生后五ヶ月を經たるチーデマン氏の一嬰兒は常に乳母に携へられて市街に出づるを大に樂しみとなせしが何時も乳母が外套を着するを見れば、假ひ泣きつゝあるも忽ち欣然たる顏色をなし、歡聲を發すること常なりしと云ふ。之れ乳母が外套を被ることゝ外出の快感とを屢々繼續して經驗したるを以て互に結合して一組の觀念となり、而して一の觀念現はるゝときは他の觀念も亦た必ず之れと同伴するに至りたるものなり。斯の如き例は少しく嬰兒に注意するものゝ常に目擊する所なれば玆に多く擧ぐるを要せざるべし

（は）　感應結合の痕跡

感應の發動は一方より考ふるときは腦の組織中に起る變化に外ならず故に甲の感覺と乙の感覺と結合して、起るときは必ず腦の組織中に其の結合的痕跡を殘すものにして、後日新たなる刺戟來りて甲の感覺を再生せしむるときは、乙の感覺も亦た必ず之れと同伴して現はるゝものなり。知覺、想像、推理等の作用は皆な此の結合の痕跡に基きて起るものに過ぎず。柔軟不定なる嬰兒の腦髓は甚だ印象を止め易きものなれば強き刺戟を受けたる結合、或は屢々反復したる結合は深く其痕跡を止めて生涯消ゆることなく、殆ど先天的に存する念觀の如く感ずるに至るものなり、例へば時間、空間に關する觀念因果の觀念及び善惡に關する觀念の如き是れなり。而して此時期に於て常に快樂を與へたるものは成長の后も何となく快樂を感じ、又た此時期に於て苦痛を屢々感したるものは何となく何時迄も苦痛を感ずるものゝ如し。されば嬰兒期に於ける快樂或は苦痛は品性の基礎をなすものと云ふも不可なかるべし。然りと雖ども嬰兒が經驗したる格段なる出來事は其事の終りたる后永く腦中に存するものなるやと云ふに、之れを反復するにあらざれば明かなる觀念として存せざるか、或は存するも現るゝこと稀なるものゝ如し。プライエル氏の一兒童は三四歲の時に於て二歲の時に乳母より言語を學び辛じて不完全なる發音をなしたることを記臆せりと云ふ。又たカーペンター氏の記載せる事實によれば、ハンサルドと云へる人一日友人と同伴して或城に行きしが、其門前に近づくと同時に突前腦中に以前此處に來りし如き感覺起りて、啻て其門を見しのみならず、其門下に驢あり又た門の頂上に人のあるを見たる感覺確かに現はれたり。然るに氏は曾て此近傍にも來りたる記臆更になしと雖ども、此等の明確なる感覺により必ず以前此處に來りし事を信せざるを得ざるに至れり。氏は之れを母に尋ねしが母は忽ち氏が十八ヶ月のとき數多の人と同伴して驢に乘せて氏を其城門につれ來り、同伴の人々は屋根の上に於て食事をなし、氏は從者及び驢と共に地上にありしことを語りたりと云ふ。又た余の一友にして僅かに十二三ヶ月の頃父　抱かれし記臆漠然と存する人あり。斯の如き例は甚だ稀有なるものなりと雖ども、嬰兒期に於ける格段なる記臆は全く消滅するものなりとは思ふべからず。或は機會なき爲め再生せざるにもせよ、幾分か其痕跡を止むる者の如し。以上略述したる三の事柄は嬰兒の心情が發達する所の形狀を現はすものにして、之れ通常知力と稱する作用の根本たるなり。知力とて別に一種の力存するにあらず唯だ感應の結合及び其の痕跡の再生する形狀を指すものに過ぎず。想像と云ひ推理と云ふも之を推し究むれば此三者の外にあるものにあらざるなり。

正誤　前號本紙十五頁英文中（二行四行）abedienceとあるはobedienceの誤植、（三行）avillとあるはwill又abeyはobeyの誤植故之を正す

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

時報

◎皇室

●華族女學校行啓　皇后陛下には、去る十一日華族女學校へ行啓あらせられたり

●大御心を海軍に寄せ給ふ　皇后陛下には、先の日横須賀なる吉野、松島、千代田の三艦を御覽遊ばせられ、吉岡筑波艦長、東郷浪速艦長に拜謁を賜はり、艦內の軍人一同には、酒肴の料を下し賜はりたりとなん、いとも畏きことにこそ

●武子女王殿下　同殿下には、こたび華族女學校內幼稚園へ御入學あらせられたり

◎學校、敎育

●福島師範學校女子部の養蠶　師範學校の女子部に於て、養蠶を爲すもの數縣に及びしが、聞く所によれば福島縣尋常師範學校校長中村恭平氏は實業敎育に意を注ぐこと太だ深切にして本年女子部生徒をして學科授業の傍ら試みに蠶兒を飼育せしむる事となし敎諭阿部德吉郞氏をして之を監督せしめ女子部寄宿舍の一部を以て蠶室に宛てしめたり種類は姬蠶、青熟、小石丸、新撰、朝鮮の五種にして去る五日、七日の兩日に於て盡く之を掃立てたりと其蟻量は總て七匁餘、農業實習場內には凡二反步の桑園あり以て蠶兒を養ふ可し女子生徒四十餘名は我を忘れて之を養ひければ其成績頗る良好なりと云ふ

●又　佐賀縣佐賀郡春日高等小學校にては近ころ三四年の兩女生徒に養蠶の一科を課せしに前途頗る有望の摸樣なりと小學校の養蠶は蓋し同校を以て嚆矢となすべきか

●富山縣の女敎員　同縣にては曾て小學の女敎員を町村長の申請に任命するの制を採りしより間々盲ふに忍ひさるの弊習を釀し女敎員は競ふて町村長其他威望者の侍婢的の觀を呈し町村長亦其美醜阿媚の分量によりて撰擇する如き奇狀を現し物論囂々末終には女敎員廢止論を現出するの止むを得さるに至らしめしより此程俄に此制を改め更に知事直命のことゝなし尙深く其平生を監察し居るといふ

●群馬縣下の子守學校　同縣下なる子守學校に就ては曾て本紙上に揭けたりしが同縣佐位郡、那波郡、西群馬郡、南勢多郡に於ける小學校內に一ヶ所宛の子守學校を設け總ての器具は村內有志より寄捐するよし美擧といふべし

●盲啞生の現在數　東京盲啞學校の現在生徒は左の如し

		通學	寄宿 自費	寄宿 給費	合計
盲	男	二〇	一四	三	三七
盲	女	五		一	六
啞	男	二〇	一八	五	四三
啞	女	九	一三		二二
合計		五四	四五	九	一〇八

●山口縣學齡兒童の統計　山口縣內に於ける昨廿六年度の學齡兒童總數は十五萬〇四百七十九人にして內男七万八千九百十五人女七万五百六十四人なり而して就學者は男六万四千八百七十五人女三万五千五百四十六人合計十万〇四百二十一人にして不就學者は男一万五千〇四十人女三萬五千〇十八人合計五万〇〇五十八人なれば之を百分比例に收算すれば學齡兒童百人中就學者男八十一人强女五十人强に當ると云ふ

●囑托學校醫　麴町區に於て市立小學校及代用小學校の間に學校醫を置くの評議ありとは兼て聞く所なりしが今回愈々實施する趣にて同區々會は一區內に先つ三人を置くことゝし一人月手當三圓と定め合計百八圓を支出せんことを議決せるよし尤も右囑托醫の撰定は同區々長より其區の醫會に委囑し醫會は該囑托醫を撰出せしが其囑托醫職務心得草案左の如しと

市立小學校及代用私立學校囑托醫職務心得草案

第一條　囑托醫は每週一回以上學童及幼稚の健否を點檢し特に傳染性諸病（六種傳染病に疥癬、百日咳、猩紅熱、麻疹、化膿性結膜炎等）に注意すへし

第二條　囑托醫は傳染病流行の傾あるときは校長と商議し其の豫防の方法を說諭すべし

第三條　校內に於て遊戲等の過失に由て生せし外傷其の他疾病は一時之れか手當をなすへし

第四條　學童幼稚生に欠席者あるときは時宜に由り其の理由を調査することある可し

第五條　校內一般の衞生上に注意し意見あるときは校長又は區長に通告す可し

第六條　囑托醫は每年末其の年度間に取扱ひたる事件及び學校衞生上に關し觀察したる大要を區長に報告することあるべし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

附則　囑託醫は區長の指名を以て區內開業醫師(若干名)に囑託し尙ほ小兒科專
脩の醫師に囑託して顧問醫となす事

●奇妙なる教員の資格　新潟縣北蒲原郡本村にて過日の村會が教育役を議するに當り小學教員の資格を左の如く定めて直に實行せり

排斥す可き教員

(一)土着の教員は老朽にして社會の進步に伴はず故に排斥せん(二)土着の教員は言語發音宜らず故に排斥せん(三)土着の教員は家事に繫累多し故に排斥せん

採用す可き者

曰く勇壯活潑進取の氣に富みたる人、曰く上國なる人、曰く父母兄弟妻子なき人

右の資格に依り土着の教員は殘らず免職せしが新たに採用す可きもの今日一日もこれ無きより心あるものは村會決議の不法を鳴らし居ると云ふ(東京日々新聞)

●學校教育と家庭の養育　とは互に相一致するに至らざれば折角の修身講義も直接の用を爲さゞるとあり、近刊の千葉縣教育雜誌に、左の如き一話あり

或日尋常科第二年生に向ひ、修身の問題を起して「汝等朝起きて後父母に對し如何に挨拶するや」と問ひしに或は俯し、或は首を振り、答辯に躊躇せし樣子なりしが、終に其の要領を得ずして「何とも申しません」と答へき、依て余は其の生徒に向ひ「朝起きて後父母に對しお早う御座ります」とは云はざるにやと反問せしに、同生徒は眞面目の顏にて「ソンナ事を云ふと內の者が笑ひます」と放言して意氣自若たり、以て家庭の養育の學校教育の一要件たるを信ずべし

●小學生徒の視力　大坂私立衞生會、小學校生徒視力調査委員の一人たる、小林春召氏が其擔當校數二十餘、生徒千八百九十六名(內男千五十六名女八百四十名)に就て、調査せし結果左の如くなりしと教育時論に見ゆ

	計	男	女
平視	一千四百六十八名	七百九十二名	六百七十六名
近視	三百四十名	二百八名	百三十二名
遠視	六十四名	三十六名	二十八名
斜視	五名	名	二名
亂視	三名	三名	なし
トラホーム	四百二十名	二百十六名	二百四名
角膜病の爲視力不充分の者	十六名	十二名	四名
眼瞼炎	九名	三名	六名

◎美　談

●貞婦賞を受く　富山縣に貞婦あり德久知事其操行を嘉し之に賞金を與ふ

射水郡大島村大字南高木村平民　木休德平妻　木下まつゑ

平素舅姑に事へて孝順夫偶々刑に觸れ縲絏の中に在ると十年爲めに家計困窮し老幼六人將さに餓死せんとするや深く之を憂へ身の軟弱を顧ず專ら農事に精勵し又他人に傭役せられ辛ふして一家の生計を維持し殊に子女の教育を忽にせざる等二十有三年一日の如し其志行洵に奇特とす依て爲其賞貳圓五拾錢下賜候事

明治廿七年五月五日　　富山縣知事　德久恒範

●孝安孝を思ふて婿を迎へず　淺草區小島町八番地に住居する鈴木お粂と云ふは幼年の頃父を亡ひ其後は實母熊と云へると二人(六十)して他人の手賤縫などして活計となせしに先頃より母は病氣に多からぬ勝手道具賣拂ひ薪炊の料にあてしかど思はしからぬ辛苦の內にお熊が看護を盡せしが彼熊に年にも恥ず四十島田も昔なる六十振袖に若やぎて芝神明町三番地吉谷忠兵衞方へ嫁入しよりお粂は濱松町藤田菓方の召使に住込みしが日毎其方にて奧より下さるゝ菓子惣菜持くれとなく母が元に送りたりしも一朝主なる人の商業上の失敗より解雇され母が元に歸宅して父母三人時計の鎖を綴きて手內職に其日を送り他人の勸めに好き聟がねもあらばと言はるれど年寄し母を殘して他家へ嫁も心苦しと兩親に使ふるを今も昔しの如しと新朝野に見ゆ

◎片　々

●女子家政學會　長崎市なる清水シゲ子及び城ミワ子の兩女史は、中流以上の子女をして能の消費者となるの技倆を養はしめんとて、先頃女子家政學會なるものを設立し之れが資を償はんとて去る頃慈善演詩會を催したる由

●春日局實父の後裔　春日局の後裔稻葉佐渡守が將榮祝けて都下に彷徨ふよしは豫て記せしが今は又春日局の實父齋藤內藏助の子孫を橫濱に見出しぬ此人名を齋藤春三郎と呼び今年三十三の男盛り即ち內藏助が十一世の孫にして父は舊幕府の旗下に屬し高六千石を領し其頃本所なる俗においてき堀、即ち今の深川猿江に邸宅を搆へ瓦解前はいと時めきし家柄なりしが後本所相生町に移り夙に近藤眞琴氏の門に入り學成て後本所松坂町に江戶義塾といふを設け無資力にて篤學の者には月謝月俸を免じ專ら人材教育を旨とせしかば氏の世話を受けし者にて目下相當の地位を占め居るも多しとぞ然るに資金繼がずして閉鎖、際脳病に罹りて家政いと意の如くならず今は橫濱住吉町六丁目七十五番地に蟄居し三四の子弟を教授して辛うじて世を送り居るといふ(大日本教育新聞)

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

小此木信一郎
布川靜淵　同著

俳諧史傳

全

和裝美本
紙數三百二頁
定價三十錢
郵税四錢

（五月一日發賣）

『俳諧史傳』出でたり、それ俳諧は我文學史上に一大特殊の光明を煥發す、一句十七有言、尺幅の裡無限の烟波渺々として際なし、俳諧は和歌に孕まれ、連歌に興り、松永貞徳となりて、諧謔を擅にし、西山宗因となりて、奇巧好笑なる談林の花を咲かしめ、更に、詩聖松尾芭蕉の大手腕をかつて、閑寂沈痾なる正風俳諧の面目を構成ず數百年の間相傳へ、相襲ぎて庶民の美妙なる想念を蕩漾せしめ幽妙なる詩天地に逍遙す、其源流に遡り、其發達を叙し、其推移を討ね、其變遷を記し、其特想を論じ、繙讀一番、炳焉として斯文學を腦底に活現せしめむとを期したるは我『俳諧史傳』なりこれを分てば、俳人個々の傳記となり、これを聯れば、整々一卷の史篇をなす、逸事あり、名句あり、一誦の下、恍々乎として、月明かに、花香しき境に遊ぶが如けむ、若しそれ、一筆輕々に下さず、一字苟もせず、而も文章平易簡明、叙記精確凱切なるや否やは世自ら公論あらむ、世の文士、一本を座右に備へざるべからず、今や印刷成る、我『俳諧史傳』は好知己を待つ者也、

前號に掲載せる七新聞二雜誌の外今日に至るまで本書に對する批評左の如し

◎中央新聞の評　本書は俳諧の園に遊ばんとする者の忠實なる手引草たらんとを期し小此木、布川兩氏の合著に成れるものなり初めに俳諧の淵源を討ね變遷を記し評論を加へたり就中松永貞德、蕉門の十哲等最も筆勞を費したるもの、如し、

◎東京朝日新聞の評　第一章を俳諧の淵源に起し次に俳諧連歌を說き次に松永貞德、其門人、檀林派、正風、蕉門十哲等に及び更に結論を附して著者の意見を現はせり考覈精といふにはあられど俳諧史傳として斯く纒りたるものを見るは實に著者の功なり沒すべからず文章は例の女學雜誌社風にして斯るものに用ひては頗る快からざるところ多し、

◎國會の評　高雅雄麗なる文字と確實精明なる考證とを借り以て俳諧變遷の因を繹ね果を究め門派を類別して其當時の境遇を論じ古今達人の傳を叙して其俳風を評し間々挿むに其名吟秀句を以てしたるは宛から錦繡の表に四季折々の花を織出したるに似て最とも麗らかなり、

◎奧羽日日新聞の評　本書は小此木、布川の兩氏が三年の星霜を費やして著述せしものなり即ち俳諧の淵源變遷を叙述して之に詳論を加へ貞德宗因芭蕉の門葉より談林の一派に入り遂に正風に說き及ほす其觀察精透公平にして所論の卓犖奇拔なる多く其比を見す世の俳諧に志す者此等の書を繙かば炳焉として斯道を腦底に活現せしめん、

◎福音新報の評　近年俳諧の復活時代とや言ふ可き、爲めに雜誌も出で來ても離しつ、東京にても中々に流行しつ、ある由、然れど組織的に之を物して明かに其道筋を示す者、未だ殆ど之れあらず、然るに今や小此木、布川兩氏の勞により「俳諧史傳」として現はれたり、其淵源より論起し、貞德、檀林、正風各派より、後ち其の流れを汲める族をも合せて一讀の下に其梗概を知らしむるは、果して幾多の便宜ぞ其道の人に非るも一讀す可し、

發行所　女學雜誌社書店

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

米國哲學博士ラルテッド君述　同志社敎授浮田和民君譯

經濟學之原理

(今般三版出來)

定價金五拾錢
郵税金八錢

此書の著者ラルテッド氏は米國エール大學故總長ウルジー氏の高弟にして十四年間京都同志社に於て經濟學を敎授せらる學士なり氏の經濟學上に於ける意見は正に是れ舊派にも偏せず新派にも僻せざる公平中正の主義を取るものにして此書は特に日本學生の爲に著述せられ其列擧する所の事實專ら日本の實例に係るものなれば我邦に於て經濟學を學はんとする者には最も便益なるものとす

發兌　東京市京橋區彌左衞門町七番地　合名會社 經濟雜誌社

賣捌●東京。國民新聞社、警醒社、丸善、小林、東京堂●大阪。岡島、梅原●京都。大黑屋、東枝●其他

博士スタカル原著

四人の人

定價二十錢
郵税四錢

博士スタウカルは成功の牧師なり。其の思想は清明にして、其の文辭は平易、議論の實際的なる、意味の深長なる、而して言々句々信仰の氣を帶びざるとなし。今茲に和澤して發售せんとする斯の『四人の人』は即ち此人の最近著述なり。薄信弱行の信者を鼓舞し、失意落膽の人を奬勵して命望あり、確信ある人たらしむると、本書を措て多く之を他に求むべからず。

目次

一 四人の人
二 誘惑
三 艮心
四 今日の宗敎
五 基督と人慾
六 公共心
七 宗敎の證據
八 青年と老年

發行所　東京趣町區四番町四番地　福音新報社
賣捌所　神田區表神保町六番地　女學雜誌社書店

● 明治女學校生徒募集廣告

本校四月學年終結に付各級へ新入を許す規則所望の人は郵券二錢封入御申越あれ

明治廿七年四月

東京市麴町區下六番町六番地　明治女學校

女學雜誌定價表

冊數	定價前金	市外定價郵税共
一冊	金六錢	金六錢五厘
十冊	金五十八錢	金六十三錢
廿六冊(半ヶ年分)	金一圓四十三錢	金一圓五十六錢
五十二冊(一ヶ年分)	金二圓六十錢	金二圓八十六錢

發賣所　東京市神田區表神保町六番地　女學雜誌社書店

明治廿六年四月廿五日內務省許可
明治廿七年五月十八日印刷
明治廿七年五月十九日發行

發行兼編輯者　東京市麴町區下六番町六番地　巖本善治
印刷者　全 牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地　根岸高光
發行所　東京北豊島郡王子村下十條八百五十一番地　女學雜誌社
印刷所　全 牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工塲(電話十九番)